

木

KINO PRESS
NO.46

野

京都精華大学
KYOTO
SEIKA
UNIVERSITY

通

木野通信 第46号
2008年7月15日発行
京都精華大学広報部広報課
〒606-8588
京都市左京区岩倉木野町137
TEL 075-702-5197

信

デッサン、あるいは考える力

学長◎ 島本 淳 SHIMAMOTO Kan

その朝が気持ちよく澄んだ天気だったせいか、それとも新幹線の中で少し真面目に読書しようと思ったためか、鞆の中にヴァレリーの『ドガ・ダンス・デッサン』という本をいれた。新訳が出たことを聞いていたためかもしれない。印象派の画家ドガについて詩人が思索した本だ。ぼくの世代では、吉田健一訳（『ドガに就て』）で読んでいたものである。ずいぶん感激したことを覚えている。

その訳本によってデッサンに興味をもったのだとも思う。興味といっても、デッサンについて考えをめぐらしてきたというにすぎないが、それでも職業柄、多くのデッサンを見てきて、その魅力を感じていた。実際に自分ででも思い、ゴッホも使ったというモレスキンの手帳を何冊も買い、そこに拙い線を引きました。普通にはデッサンと呼ばれるような代物ではないが、それでも、線を引くことが大きな魅力をもつことであることも少しはわかってきたのだ。

デッサンという仏語は、素描といった技術的な意味だけでなく、意図や構想といった意味もある。もともとは、伊語のディゼーニョからきていて、昔は意図という意味を現在より強くもっていた。ちなみに、デッサンを英語にしたのがドローイングだが、英語からはデッサンのもつ概念性はなく

なって、絵画の技術的な意味合いだけが強調される。ここでのデッサンはドローイングでなく、昔の概念が近代化され新しい意味合いをもつようになったデッサンである。ヴァレリーのドガ・デッサンもそのことを書いているのだ。

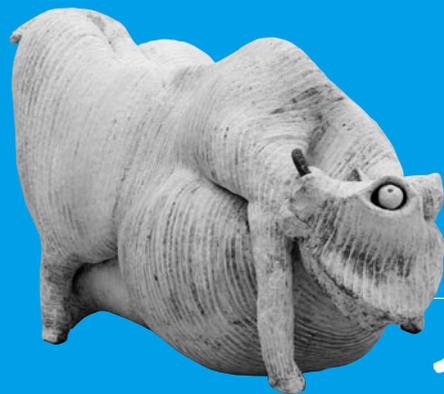
文章の方向が美術史の講義のようになってきたが、ここで書きたいのはそうしたことはない。ともかく、鞆の中から取り出したヴァレリーを車中でペラペラめくりながら、久しぶりにデッサンのもつ力について考えていた。そして、その力が美術の領域だけのことでなく、ぼくたち人間の考えるということと関係しているとあらためて感じていた。そのことを書いてみたかったのだ。そして、そのことと、40周年を迎えた精華のこれからとが、どこかでリンクするだろうと感じたこともある。

ヴァレリーはドガに、こんな言葉を語らせている。よく知られた一節である。「デッサンはフォルムではありません。デッサンとはフォルムの見方です。」いろいろな解釈が可能な言葉だが、美術的観点からすれば、デッサンとは、ヴァレリーも説明するように、模写のような正確な物のかたちの写しではなく画家独自の物の見方であるということだろう。しかし、ドガの言葉には、

美術を超えたことを考えてもよい、と思わされる深さがある。だから、ヴァレリーも次のように書くのだろう。

「デッサンは精神の経験し得る最大の魅惑である、とも言える。」（吉田健一訳）つまり、精神という大きな次元でデッサンをみることである。デッサンとは、私が物や人を通して世界をどのように発見していくかの過程をかたちにしたものと言えるのではないか。それは「私」を発見する過程でもあるだろう。こんなに理屈っぽく書かなくても、すぐれた美術家たちのデッサンをしつかり見れば、一目瞭然なことである。こうしたことをぼくはジャコメッティの人物デッサンで教えられたのだが、久しぶりにヴァレリーを読んで、ドガをもう一度見ようと思っている。もちろん、もう一度デッサンをしようとも。

ともかく、ぼくたちはもう少しデッサンをする必要があるのではないか。もう少し世界を見る必要があるのではないか。デッサンするためにはある場所において、ある物に向かい合う必要がある。時間がかかるのだ。それだけ、すでに考えるということになるのだが、そこで目を動かす、息をす、耳も澄ます。そして、手を動かす。白い紙に最初の線が引かれる。そこから、あるいは、そうしてこそ、世界への旅は始まると思うのだ。



204C005 大江志織「牛」

2009年4月、人文学部改組

文化表現・社会メディア・環境社会の3学科から、5つのコースから成る「総合人文学科」へ拡充

2009年度4月、人文学部3学科は、5つのコースから成る人文学部「総合人文学科」へと改組される。

従来の学問領域にとらわれず、実社会と関わり、多様な価値観と出会いを大切にしてきた「行動する人文学」をさらに深め、より実践的に、よりクリエイティブに学ぶことができる環境へと生まれ変わる。

1年次で基礎を学び、2年次からコースを選択

総合人文学科では、1年次にしっかりと基礎を学び、大学4年間の土台を築く。2年次からは、「現代文化表現」「国際コミュニケーション」「日本・アジア文化」「環境未来」「現代社会と人間」の5コースより、自分の興味や個性に合ったテーマを探究できるコースを

選択する。

5つのコースの特徴

「現代文化表現コース」では、ポップカルチャーを理論と実践の両面から研究。講義だけではなく、制作やワークショップなどの表現活動を通して学習を進めていく。また、作家や編集者などのプロを招いた授業も展開する予定。

「国際コミュニケーションコース」では、英語のスキルアップと、グローバルな視点に基づいた異文化理解を目指す。英語でのコミュニケーション力を養うために、世界各国への短期留学など、現場で学ぶ機会を充実させる。また、本学で学ぶ留学生の生活や学習を日本人学生がサポートすることで、出身国を超えた学生同士の交流を進めていく。

「日本・アジア文化コース」は、京都の歴史や伝統文化を探りつつ、日本やアジアの歴史、宗教、社会などへ視野を広げていく。そのための多彩なフィールドワークや、国内外への短期留学などの体験学習の場も豊富に用意される。

「環境未来コース」では、自然環境問題はもちろん、都市や農山漁村の現状、企業や産業界のあり方など、環境問題を広い意味でとらえ、持続可能な社会への道を探求。企業や地域社会でのフィールドワークを通じ、社会で幅広く活躍できる人材を育てる。

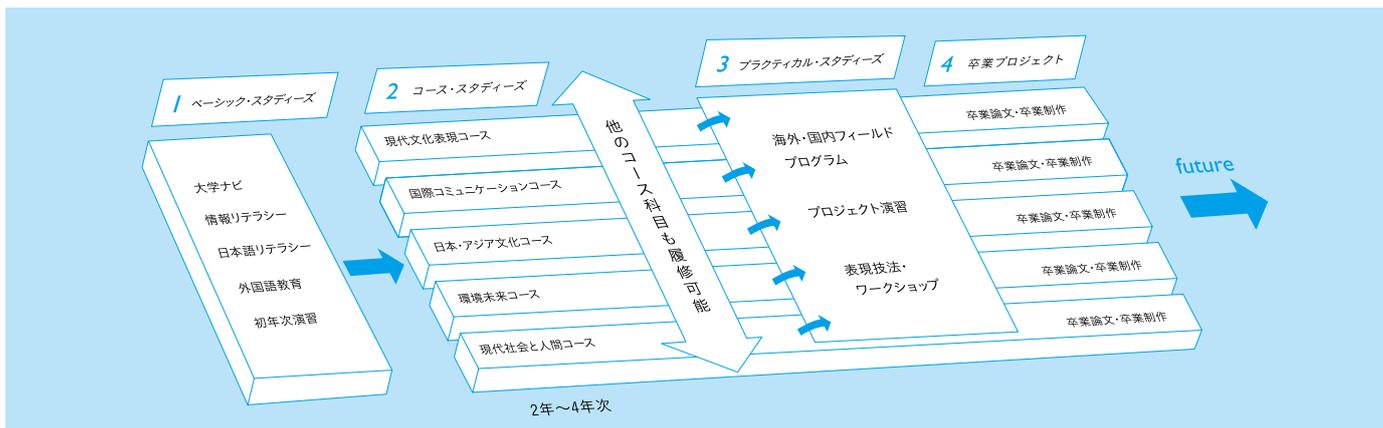
「現代社会と人間コース」は、現代社会が抱える諸問題と人間の関係を、心理、身体、教育、福祉など幅広いアプローチで読み解き、解決策を模索。実践的な学びを通じて、社会に提言する力をはぐくんていく。

体験・表現を重視するプログラム

総合人文学科では、現在の人文学部カリキュラムをさらに洗練させ、「海外・国内フィールドプログラム」や「プロジェクト演習」、「表現技法・ワークショップ科目」など、学生が体験的に学び、表現することを通じて成長していけるプログラムに再編。思考と知識を実践的に進化させるプログラムを用意する。

2年進級時に選択したコース以外からも授業を履修することができ、人文学部の学びの自由度はさらに高くなる。オリジナルな視点を確かなものとし、自分のテーマを表現することで成長できるプログラムに進化する。

学問の枠や領域にとらわれず、地域や国境も越え、人間や社会について、自らの興味や問題意識に基づいて学ぶ総合人文学科。独自の視点で問題を突き詰め果敢に表現する、実社会で通用する行動力とコミュニケーション力を持った人材の育成を目標としている。



国際デザイン会議、大盛況のうちに閉幕

京都精華大学がアジア初の事務局校を務める

京都国際デザイン会議「Cumulus Kyoto 2008」が3月28日から31日にかけて開催された。クムルスとは、世界40ヶ国124校の加盟校をもつ世界最大規模の芸術系大学コンソーシアム。毎年各国で会議が開かれており、今回の京都会議は京都精華大学がアジア初の事務局校を務めた。日本・京都での開催にちなみ「空」[C.U.]デザイン：ゼロからの再構築」をテーマとし、本学キャンパス内や国立京都国際会館、京都国際マンガミュージアムなどでイベントを開催。海外からは卓越したデザイン教育・研究機関の関係者などが230名余り参加し、国内からも400名以上の参加者が集まった。

28日の「国際デザインフォーラム」では、クムルスのクリスティアン・ゲルラン会長が、「京都デザイン宣言」を採択。人間性ある持続可能な世界に貢献するデザインの役割を確認した。この宣言文には、京都議定書が結ばれた都市、京都での開催を記念する意味も込められていた。

同日に行われた講演では、武者小路千家第十四代家元の千宗守氏、グッドデザイン商品選定制度（Gマーク制度）の創設者である平野拓夫氏、グラフィックデザイナーの原研哉氏、デザインディレクターの川崎和男氏の各氏が今テーマ『空』の概念に触れ、日本のデザインの原点に立ち返り、デザインの果たす役割について語った。

開催期間中は、各校の展示ブースを設置し

たり、大学教育交流フォーラムを行ったりと日本と海外の美術デザイン系大学との交流が積極的にもたれた。また、学生ボランティアの意欲的な活動が目立つなど、有意義な会議となった。



アセンブリーアワー講演会

石内都氏、近藤良平氏、辰巳芳子氏など、豪華ゲストが続々登場

1968年の大学創立から開催されている「アセンブリーアワー講演会」。各界の第一線で活躍する方を講師に迎え、幅広いジャンルのテーマで開催し、好評を博している。2008年前期も豪華ゲストが続々と登場し、在学生はもちろん、一般の方からも好評を博している。

5月15日 石内都氏 写真家

母の遺品を撮影したシリーズ「Mother's」を2005年ヴェネチアビエンナーレ日本館代表として発表した石内都氏。彼女は「痕跡を撮る」写真家とも呼ばれる。その石内氏自らが、第4回木村伊兵衛賞受賞作を含む初期三部作から、最新作「ひろしま」に至るまで、映像で振り返りながら作品について語った。



6月5日 近藤良平氏 振付家、コンドルズ主宰

NHKの番組からアーティストのプロモーションビデオまで幅広い分野で活躍をみせるかたわら、コンドルズ主宰としての顔も合わせ待つ振付家・近藤良平氏が、「振り付け」



という遊び方」をテーマに講義。ダンスというものの流れを解説しつつ、近藤氏がたずさわった仕事の数々やダンスに対する考え方を魅力的な語り口で聞かせ、場内からは笑い声がたえなかった。

6月12日 的川泰宣氏

独立行政法人宇宙航空研究開発機構（JAXA）宇宙教育センター長

日本初の人工衛星「おおすみ」の打ち上げ、ハレー彗星探査、宇宙航空研究開発機構（JAXA）の立ち上げ、そして昨年暮れの月周回衛星「かぐや」まで…。日本の宇宙開発の導き手として、数々の歴史的場面に立ち会ってきた的川泰宣氏が「宇宙」がヒトの心に火をつける」という大きなテーマで語った。映像資料をもとに人びとの宇宙へのあこがれ、国際宇宙開発における成功と挫折を振り返りつつ、暖かみのある語り口で、日常のさまざまな事象や事件を「宇宙」という視点から眺めてみることを問いかけた。



また、6月26日には料理家、随筆家の辰巳芳子氏、7月3日にも、芥川賞受賞作家でありシンガーでもある川上未映子氏と千野帽子氏の対談が開催。後期にもさまざまな表現者が登場する予定だ。

活躍する卒業生

葵祭のヒロインに抜擢

青空が広がる5月15日、今年も葵祭が開かれた。真っ白なおしろいと真紅の唇。今年新調された十二単を身にまとい、腰輿（およよ）に乗っていたのが、第53代齋王代に選ばれた村田紫帆さん、人文学部の卒業生だ。

「すべてが非日常で、夢の中にいたような一ヶ月でした。一生に一度の経験をさせてもらいました」。

齋王代に選ばれた重み、影響力は、彼女の想像以上だったという。京都のしきたりに習って挨拶にまわったり、今まで縁のなかった報道記者たちと出会ったり。童女役の子どもたちが「おひめさんと一緒に写真撮りたい」と集まってきた。

そんな村田さんの普段の顔は、実家の『菊乃井』の若女将。社長である父と、女将である母のサポートをしている。「たいたいことはしてないんです。自分ができることをするだけで」。予約の管理、生花、東京の物販などを担当し、若女将と呼ばれるようになって3年になる。

精華は懐の深い場所

齋王代、老舗料理店の若女将の顔をもつ村田さんだが、まわりが大きく変化しても、いつも等身大の自分の感じ方を大切にしている。それは、学生時代に「自分らしくあること」の大切さを意識したからかもしれない。精華で体験したフィールドワークでは、タイの古着マーケットで安いTシャツを買い、「また変なTシャツ着てる」と友人に笑われた。



「自分ではかわいいと思って着ていたんです（笑）。精華は、個性的な人たちを受け入れる懐が深い。みんな自分が好きなものを好きと主張していました。かといって、衝突もしないし、否定もしなかった」。

彼女は小さい頃から『ものづくり』が好きで、今でもフェルト生地を使ってストラップや置物をつくっている。去年の11月には、友人が経営するお店で小さな個展を開いた。「ずっとものをつくっていたい。精華で出会った、かけがえのない人たちと、ずっと友達でいたいですね」。

葛藤と決意

最近、新しいパッケージ（包装紙や資材の選択、包装の方法など）を任せられることになった。「会社は社長の考えでまわっているので、私がこだわっている部分と、譲らな部分とがありますね。自分の代になったら、自分のカラーにしていけるように、ゆっくりやっていきます」と微笑む。

自分の置かれる環境をゆっくりと受け入れながら、どうしても譲れないものを大切に守っていく。それが、25歳の彼女らしきにあふれた決意だ。

人文学部人文学科卒業（201L264）「菊乃井」若女将／第53代齋王代 **村田紫帆さん**

塩田千春さん 美術学部造形学科洋画コース卒業（92P023） 現代美術家



【Information】
『塩田千春 精神の呼吸』
7月1日～9月15日
国立国際美術館 ※本人によるトークやライブ・パフォーマンスなども予定。詳細は、国立国際美術館 Web サイト (<http://www.nmao.go.jp/>) まで



芸術選奨文部科学大臣新人賞を受賞
洋画専攻の卒業生・塩田千春さんは、ベルリンの自宅でその電話を受けた。文化庁が主催する『芸術選奨文部科学大臣賞』の美術部門新人賞を受賞したという知らせだった。「うれしかったです。学芸員の方など、関わってくださった人たちの顔が浮かんできました」。

塩田さんはベルリンを拠点に活動する現代美術家。代表的な作品には、天井、壁、床にまるで蜘蛛の巣のように黒い糸を張りめぐらせ、その中にベッドを置いた作品や、泥で染まった巨大なドレスを天井から吊るし、ひとつひとつの上からシヤワーが伝い落ちる作品などがある。どれも大規模なインスタレーションだ。「作家の中には手伝ってもらうのがイヤな人もいるし、私も最初はそうでした」。

でも私の作品は一人では完成しない。こまでは自分、あとは任せると決めてつくるようになってきましたね。数々の受賞も、協力者がいてくれたおかげと感じているという。

年に6回以上も展覧会をした学生時代
学生時代から頻りに展覧会を開いていた彼女。「春秋館や7号館のギャラリで、年に6回くらいやってました。それが今もずっと続いている感じ」だという。ドイツに渡ったときも2週間後には展覧会を催した。今年も月に1回のペースで開いている。絵のように描きためるといふことがないので、作品を作り続けるために展示場所を決めていくのだそうだ。「こういうものをつくりたいというイメージを、展示場所に入れていくんです」。

地元・大阪で個展を開催

そんな彼女が、地元・大阪で個展を開く。国立国際美術館での『精神の呼吸』だ。作家が作品をつくるときの精神の呼吸を伝えようというテーマで、3年前から学芸員の方と一緒に取り組んできた。

開催を目前にひかえ、糸糸を手に作品の仕上げをする彼女に聞いてみた。糸という素材を使う意味とは？「糸に興味をもったのは油絵の延長。空間にドロイングする感覚で、線にみたてたのが始まりです。切れたり、からまったり、ほどけたり、心の動きに似ていると感じます」。彼女の精神の呼吸を感じられる個展になりそうだ。

活躍する卒業生

前期授業、特別講義の数々

5/13 石川九楊先生

ビジュアルデザイン学科 特別講義

「日本語とデザイン」に関して講義。西洋の言語と比較しつつ、日本語が“文字”を話し“文字”を聞く言語であるという事を解説。また、近年クローズアップされている和のデザインは、漢字・平仮名・片仮名の3つの“文字”からなる“日本語”によって支えられているという事など、デザインと日本語の関連性を語った。



5/19 オールハン・パムク氏講演会

人文学部改組記念講座

2009年度に総合人文学科として新たなスタートをきる人文学部の改組を記念しての講演会。「表現の可能性」をテーマに、ノーベル賞受賞作家であるオールハン・パムク氏が講演。パムク氏は、「内包された作者」というものに関してトルコ語で朗読し、本学の教員からの質疑にも快く返答した。



5/22 山本容子先生

ビジュアルデザイン学科 特別講義

本学客員教授・山本容子先生に加え、東京藝術大学の講師で、ステンドグラス作家でもある中野竜志氏をゲストに迎えての特別講義。下絵もエッチングで手掛けているという山本先生の作品制作風景VTRに続き、中野氏によるステンドグラス制作方法のVTRおよび解説など。学生たちは興味深く映像に見入っていた。



6/9 石岡正人先生

アニメーション学科 映像制作特別実習

石岡正人先生が担当するのは、12月まで続く「映像制作特別実習」。この日は2度目の授業日で、学生たちは班ごとに分かれ、シナリオ制作の際に、一場面ごとの設定や要点を書き込む「箱書き」を制作し、発表した。石岡先生は、プロの視点から学生たちの作品に厳しい意見や指摘をしながらも、どうすればよりよくなるか細やかにアドバイスをされた。



6/10 りんたろう先生

アニメーション学科 特別講義

アニメーションコース1・2年生に向けて行われた今回の講義。客員教授のりんたろう先生は、大学生活の4年間で今後の方向性を決めていける、アニメを観る側から創る側になるのだと学生を激励した後、自身が今制作中だという3DアニメーションのプロモーションVTRを放映。日本が得意とするアニメにおける情感表現を、3Dアニメーションでも挑戦し、新しい世界を持った日本独自の3Dアニメーションの方向性を示したいと語った。



6/12 タナカカツキ先生

ビジュアルデザイン学科 特別講義

はじめて顔をあわせる1年生のために、自身のプロフィールを近況を交えて饒舌に語ったタナカカツキ先生。新しいことがどんどん巻き起こるところがデザインの面白いところだという。媒体によって表現を変えるかとの問いに「新しいものは使った方がいいと思うが、根本的な部分は一緒なので変わらないし変えられない。普段の遊びの中や生活の中から、マンガやイラストやCGといった様々なクリエイションが生まれる」と返答した。



6/18-19 竹熊健太郎先生

マンガ学部 特別連続講義

今年度よりマンガ学部の客員教授に就任した竹熊先生の連続講義は全6回で、「マンガとアニメーションの間に」と題されて開催。第1回の初日は「ウインザー・マッケイの人と業績」と題し、漫画家でありアニメーション作家であるマッケイの作品を通してマンガ・アニメーションの本質を考察。第2回の翌日は「ウォルト・ディズニーをどうとらえるか」。ディズニーの軌跡を見ながらアニメ制作とエンターテインメントの本質について説いた。



2008年度 京都精華大学客員教授一覧

- 【人文学部】日高敏隆（動物行動学者）
- 【芸術学部】北川フラム（アートディレクター）
- ／松本俊夫（映像作家）
- 【デザイン学部】浅葉克己（アートディレクター）
- ／黒須美彦（クリエイティブディレクター）
- ／タナカカツキ（マンガ家、映像作家）
- ／野末敏明（クリエイティブディレクター）
- ／山本容子（銅版画家）
- ／アウグスト・グリッポ（デザインプロデューサー）
- ／堀木エリ子（和紙アートディレクター）
- ／マイケル・ロットンディ（建築家）
- ／安井清（建築家）
- 【マンガ学部】村上もとか（マンガ家）
- ／石岡正人（アニメーション学科）
- ／富野由悠季（アニメーション監督）
- ／りんたろう（アニメーション監督）
- ／由利耕一（編集者）

2008年度 新任教職員

2008年4月から
本学に新任した教職員の方々です。

芸術学部

【造形学科】

- 吉野 央子 (立体造形コース 准教授)
- 宮永 甲太郎 (陶芸コース 講師)
- 牧野 浩紀 (版画コース 講師)

デザイン学部

【ビジュアルデザイン学科】

- 角谷 和好 (グラフィックデザインコース 教授)
- 中尾 博 (イラストレーションコース 教授)
- 黒須 美彦 (ビジュアルデザイン学科 客員教授)

【プロダクトデザイン学科】

- 安藤 眞吾 (インテリアプロダクトデザインコース 教授)

【建築学科】

- マイケル・ロットンディ (建築学科 客員教授)
- 安井 清 (建築学科 客員教授)

マンガ学部

【マンガ学科】

- GM・スタルタ (カートゥーンコース 教授)

【アニメーション学科】

- 野村 誠司 (アニメーションコース 准教授)

- 川辺 真司 (アニメーションコース 講師)
- 石岡 正人 (アニメーション学科 客員教授)
- 呉 智英 (マンガ学部 客員教授)
- 竹熊 健太郎 (マンガ学部 客員教授)
- 中野 晴行 (マンガ学部 客員教授)

事務局

- 新家 聖悟 (経理課)
- 西川 朋子 (就職課)
- 三浦 茂治 (総務課)
- 山本 裕也 (教育推進センター)

2007年度 退職教職員

以下の教職員の方々が
2007年度で退職されました。

- 黒澤 正一 (人文学部 環境社会学科)
- 村田 麻里子 (人文学部 社会メディア学科)
- 村上 泰造 (芸術学部 立体造形)
- 川崎 千足 (芸術学部 陶芸)
- 黒崎 彰 (芸術学部 版画)
- 松野 潔子 (芸術学部 外国語科目)
- コシノユマ (デザイン学部 建築)
- 牧野 圭一 (マンガ学部 ストーリーマンガ)
- ペラ・ヴィルジリ (マンガ学部 カートゥーン)
- 石川 伸晃 (教育推進センター)
- 佐藤 正幸 (図書情報課)
- 田中 岳 (教育推進センター)
- 藤井 義昭 (事務局 就職課)

2008年度 大学人事体制

2008年度の大学役職者は
以下のとおり。

- 理事長 ————— 片桐 充
- 学長 ————— 島本 浣
- 専務理事・常務理事(企画担当) ————— 赤坂 博
- 常務理事・副学長(教学担当) ————— 吉富 康夫
- 常務理事・副学長(学生担当) ————— 葉山 勉
- 常務理事(総務担当) ————— 上々手 良夫
- 理事 ————— 杉本 貞彦
- 理事 ————— 佐藤 茂雄
- 理事 ————— 木村 政雄
- 理事 ————— 熊田 泰彦
- 監事 ————— 間 昌一郎
- 監事 ————— 中村 善治
- 監事 ————— 位ノ花 俊明
- 芸術学部長 ————— 佐川 晃司
- デザイン学部長 ————— 松谷 昌順
- マンガ学部長 ————— 竹宮 恵子 (新任)
- 人文学部長 ————— 鷺尾 圭司
- 大学院芸術研究科長 ————— 新井 清一
- 大学院人文学研究科長 ————— 斎藤 光
- 学長室長 ————— 石田 涼
- 教務部長 ————— 高橋 伸一
- 学生部長 ————— 池垣 禎彦
- 入学部長 ————— 栗巢 満
- 国際交流室長 ————— 小松 敏宏
- 情報館長 ————— 島本 浣 (兼任)
- 就職部長 ————— 高橋 勇
- 企画室長 ————— 関口 正春 (新任)

- 広報部長 ————— 福岡 正藏
- 財務部長/情報管理部長 (兼任) ————— 上々手 良夫
- 総務部長 ————— 有田 好人
- 表現研究機構代表 (兼任) ————— 中尾 ハジメ
- 環境ソリューション研究機構代表 ————— 山田 國廣
- 京都国際マンガミュージアム 館長 ————— 養老 孟司
- 京都国際マンガミュージアム 事務局局長 ————— 上田 修三



二〇〇七年度決算について

二〇〇七年度の帰属収入は約七億円でした。このうち学生納付金は約七九%を占めています。

この中から五号館日本画実習室の窓枠補強工事、本館建替えに伴う事務局仮移転関連の改修工事、五・七号館排水処理設備新設等で約一億円の施設関係支出を行いました。また情報館の第二次整備事業、アニメーション学科のスタジオ機器設置、黎明館CALL教室の機器更新、その他経常的な図書・備品充実等で約二億一千万円の設備関係支出を行いました。これらを含め、大学の基本財産取得等に関わる基本金組入額は四億六千万円となりました。

消費支出（人件費・経費等）は約六八億円となり、消費収支は約一億五千万円の支出超過となりました。この結果、累積消費支出超過額はおよそ三十億七千万円となりました。

二〇〇八年度予算について

二〇〇八年度に「創立四十周年記念事業」の中核事業として、老朽化した本館の増床建替え工事を行います。工事費のうち、六億一千万円は借入金により調達する予定です。また二〇〇九年度に誕生する「総合人文学科」の広報や、教育研究活動の海外展開等を行います。単年度の消費収支は基本財産取得に関わる基本金組入等を含み七億一千万円程度の支出超過予算となっています。

収入については、学費の改定の一方で補助金獲得や受託事業等によって外部資金を導入し、増収と教育研究活動の活性化を図ります。また四十周年寄付金として一億円を計上しており、これにつきましては皆様のご支援を受け賜ることができれば幸いです。

二〇〇九年度以降は単年度収支をできるだけ早期に黒字回復し、教育活動の充実とともに財政の安定化をはかっていきます。

2007 (平成19) 年度

2007 (平成19) 年 4月 1日から2008 (平成20) 年 3月31日まで

資金収支計算書

(単位:千円)

収入の部	
科目	金額
学生納付金収入	5,600,053
手数料収入	87,049
寄付金収入	31,815
補助金収入	887,787
資産運用収入	69,532
資産売却収入	427,036
事業収入	232,528
雑収入	180,508
前受金収入	1,677,003
その他の収入	755,567
資金収入調整勘定	△ 1,902,461
前年度繰越支払資金	3,525,533
収入の部合計	11,571,950
支出の部	
科目	金額
人件費支出	3,306,444
教育研究経費支出	1,655,756
管理経費支出	741,534
借入金等利息支出	81,878
借入金等返済支出	241,320
施設関係支出	103,678
設備関係支出	213,839
資産運用支出	1,042,127
その他の支出	223,402
資金支出調整勘定	△ 87,916
次年度繰越支払資金	4,049,887
支出の部合計	11,571,950

消費収支計算書

(単位:千円)

消費収入の部	
科目	金額
学生納付金	5,600,053
手数料	87,049
寄付金	36,338
補助金	887,787
資産運用収入	69,532
資産売却差額	2,174
事業収入	232,528
雑収入	180,508
帰属収入合計	7,095,969
基本金組入額合計	△ 460,190
消費収入の部合計	6,635,779
消費支出の部	
科目	金額
人件費	3,521,258
教育研究経費	2,331,360
管理経費	809,704
借入金等利息	81,878
資産処分差額	28,456
徴収不能額	12,539
消費支出の部合計	6,785,196
当年度消費支出超過額	149,417
前年度繰越消費支出超過額	2,920,157
翌年度繰越消費支出超過額	3,069,574

2008 (平成20) 年度

2008 (平成20) 年4月1日から2009 (平成21) 年3月31日まで

資金収支計算書

(単位:千円)

収入の部	
科目	金額
学生納付金収入	5,825,738
手数料収入	87,300
寄付金収入	100,000
補助金収入	835,370
資産運用収入	76,773
資産売却収入	499,500
事業収入	266,732
雑収入	162,135
借入金等収入	612,000
前受金収入	1,572,000
その他の収入	349,638
資金収入調整勘定	△ 1,950,003
前年度繰越支払資金	4,049,887
収入の部合計	12,487,071
支出の部	
科目	金額
人件費支出	3,588,490
教育研究経費支出	1,554,994
管理経費支出	779,009
借入金等利息支出	74,565
借入金等返済支出	216,490
施設関係支出	1,474,286
設備関係支出	352,815
資産運用支出	1,000,000
その他の支出	150,395
予備費	100,000
資金支出調整勘定	△ 158,837
次年度繰越支払資金	3,354,863
支出の部合計	12,487,071

消費収支計算書

(単位:千円)

消費収入の部	
科目	金額
学生納付金	5,825,738
手数料	87,300
寄付金	105,000
補助金	835,370
資産運用収入	76,773
資産売却差額	500
事業収入	266,732
雑収入	162,135
帰属収入合計	7,359,548
基本金組入額合計	△ 959,000
消費収入の部合計	6,400,548
消費支出の部	
科目	金額
人件費	3,608,200
教育研究経費	2,286,994
管理経費	848,009
借入金等利息	74,565
資産処分差額	178,900
徴収不能額	15,000
予備費	100,000
消費支出の部合計	7,111,668
当年度消費支出超過額	711,120
前年度繰越消費支出超過額	3,069,574
翌年度繰越消費支出超過額	3,780,694

貸借対照表

2008 (平成20) 年 3月31日現在

(単位:千円)

資産の部			
科目	本年度末	前年度末	増減
固定資産	22,914,128	22,741,707	172,421
有形固定資産	18,787,501	19,222,263	△ 434,762
土地	4,068,855	4,068,855	0
建物	11,754,271	12,164,224	△ 409,953
構築物	619,980	656,734	△ 36,754
教育研究用機器備品	1,289,566	1,291,307	△ 1,741
その他の機器備品	47,411	49,056	△ 1,645
図書	1,002,515	986,925	15,590
車輛	4,902	5,162	△ 260
その他の固定資産	4,126,627	3,519,444	607,183
電話加入権	3,566	3,566	0
有価証券	2,978,894	2,378,058	600,835
長期貸付金	534,080	527,703	6,377
退職給与引当特定資産	448,950	448,950	0
第3号基本金引当資産	150,000	150,000	0
保証金	11,137	11,166	△ 29
流動資産	4,586,134	4,468,139	117,995
現金預金	4,049,887	3,525,533	524,354
未収入金	269,053	681,255	△ 412,202
貯蔵品	6,112	5,812	299
短期貸付金	18,403	14,719	3,684
有価証券	201,758	201,055	703
立替金	10,066	5,140	4,926
前払金	30,837	34,625	△ 3,788
仮払金	20	0	20
資産の部合計	27,500,262	27,209,846	290,416

(単位:千円)

負債の部			
科目	本年度末	前年度末	増減
固定負債	3,528,438	3,530,113	△ 1,676
長期借入金	2,682,700	2,899,190	△ 216,490
退職給与引当金	845,738	630,923	214,814
流動負債	2,170,733	2,189,413	△ 18,681
短期借入金	216,490	241,320	△ 24,830
未払金	79,395	131,893	△ 52,498
前受金	1,677,003	1,633,408	43,594
預り金	197,845	182,792	15,053
負債の部合計	5,699,170	5,719,527	△ 20,357
基本金の部			
科目	本年度末	前年度末	増減
第1号基本金	24,274,667	23,873,477	401,190
第2号基本金	0	0	0
第3号基本金	150,000	150,000	0
第4号基本金	446,000	387,000	59,000
基本金の部合計	24,870,667	24,410,477	460,190
消費収支差額の部			
科目	本年度末	前年度末	増減
翌年度繰越消費支出超過額	3,069,574	2,920,157	△ 149,417
消費収支差額の部合計	△ 3,069,574	△ 2,920,157	△ 149,417
負債の部、基本金の部及び消費収支差額の部合計			
科目	本年度末	前年度末	増減
負債の部、基本金の部及び消費収支差額の部合計	27,500,262	27,209,846	290,416

本館建替工事に関して

今年度、本館の老朽化にともなう建替工事により、事務局が対峰館1階および明窓館に移転しております。郵送先・電話番号・FAX番号・E・Mail等に変更はございませんが、ご訪問の際などにはご注意ください。皆様にはご不便をおかけしますが、ご理解・ご協力のほどよろしく願いたします。

各コースのWebサイトが 続々と完成

京都精華大学Webサイトの各学部トップページに、コースごとのWebサイトへのリンクが続々と増えてきています。カリキュラムや教員紹介のほか、授業の様子に触れたブログなど、それぞれに特徴が盛り込まれており、各コースが持つ独自の空気をより身近に感じられる内容になっています。ぜひ一度ご覧ください。

表現研究機構より『ポピュラーカルチャー研究』『表現 Human Contact』刊行

京都精華大学表現研究機構より、研究報告集『ポピュラーカルチャー研究』第13号、雑誌『表現 Human Contact』第2号が刊行されました。

『ポピュラーカルチャー研究』は4月に3号同時に刊行。表現研究機構の研究プロジェクトのひとつである「ポピュラーカルチャー研究会」の2007年度の研究成果の報告書で、研究内容やディスカッションの様子などが収録されています。各号のテーマは、第1号「カフェ」、第2号「カタログ」、第3号「私

『KINO』好評発売中

京都精華大学情報館が編集・発行するワンテーママガジン、『KINO』の第7号が好評発売中です。今回のテーマは「21世紀のマンガ・コミック雑誌の消滅する日」。高橋ツトム氏や松本次郎氏などの人気作家のインタビューに加え、21世紀のマンガ・ベスト60 および、21世紀の携帯マンガ・ベスト15 も掲載されていて、今後のマンガ界を知るためには必読の1冊。『KINO』は全国有名書店で発売中。購読に関するお問い合わせは河出書房新社まで。



たちはなぜ〈応援〉するのか?。今年度も連続して刊行する予定であり、テレビCM研究プロジェクトの研究報告書も刊行を検討しております。

また、ポピュラーカルチャー研究の果たす役割を広く理解してもらうことを目的とした『表現 Human Contact』では、ポピュラーカルチャーにおける「表現」をテーマに、レポートやコラム、評論等、さまざまな表現を通してポピュラーカルチャーに接近することを試みています。5月に発行された第2号

創立40周年記念事業 に関する募金のお願い

今年、京都精華大学は創立40周年を迎えます。この記念すべき年に、さまざまな周年記念事業を計画しています。9～12月にはアーティストを招いたイベント、展覧会、記念誌の出版なども予定。卒業生や在学学生、教職員はもちろん本学に関わるすべての人々の記憶に残るものと考えています。つきましては、今後10年、20年と続く展望を込め、ご寄付のご協力をお願いしております。寄付金は一口一万円からです。詳細に関しては「募金要項」をお取り寄せください。この寄付金につきましては、文部科学省から「特定公益増進法人であることの証明書」の交付を受けていますので、所得から税金控除を受けることができます。詳細のお問合せや募金要項のお取り寄せは、京都精華大学企画室(075-702-5201)までお願いいたします。

のメインテーマは、「見る美術↑見られる美術」。第60回カンヌ国際映画祭にて「殭(もがり)の森」で審査員特別賞を受賞した河瀬直美監督をはじめ、マンガ批評家の夏目房之介氏、本学アニメーション学科教員でもある杉井ギサブロー先生など、多数の著名人が連載を持ち、読み応えのある内容となっています。

